

大和郡山市

筒井城第3次

森目地区発掘調査概報

1991. 3. 31

大和郡山市教育委員会

大和郡山市

筒井城第3次

森目地区発掘調査概報

例　　言

- 本書は、大和郡山市筒井町1264において実施した筒井城跡発掘調査の概報である。
- 調査は民間大型小売店舗建設を契機として実施した。調査期間は平成2年2月26日～同年3月31日である。
- 調査は下記の組織によって実施した。

(事務一般)

奈良県立橿原考古学研究所総務課

(現地調査)

技師：山川 均（大和郡山市教育委員会）

補助員：下大迫幹洋（奈良大学）、藤岡英礼（高野山人学）、御宮司和史（関西学院大学）

作業員：岸田勝信、堀川正治、米田利男、杉山典三、谷潤喜一、大橋一夫、今西卯之

松、喜多美寿子、城タマエ

- 本概報は、下記の分担によって作成した。

(製図・トレース) 山川、濱口芳郎（大和郡山市教委）、竹内直子（京都女子大学）、

武田浩子（佐保女学院O・B）、下大迫

(写真) 山川

(執筆、編集) 山川

目　　次

I.はじめに.....	1
II.筒井城における既往の調査.....	2
III.調査の概要	
1. 調査方法および層序.....	3
2. 遺構.....	4
3. 遺物.....	6
IV.まとめ.....	9

I はじめに

今回の調査は、民間の大型小売店舗建設に伴う事前発掘調査である。調査は、開発業者の委託に基づき、奈良県立橿原考古学研究所がそれを受託する形で行われた。なお、実際に現地調査を担当したのは大和郡山市教育委員会である。

現地調査は平成2年2月26日～同年3月31日にかけて行われた。調査面積は約420m²である。以下、統章において、検出遺構、出土遺物その他についての概要を記す。



図1 調査地位置図 (S : 1/10,000)

II 筒井城における既往の調査

筒井城跡は、興福寺一乗院方宮符衆徒棟梁であった筒井氏の拠城として知られている城郭跡である。特に、その構造上においては、平城形式をとる点に特色がある。今日、その痕跡を明瞭に残す外濠は、天正7（1579）年に筒井順慶による大規模な城郭整備のさいに完成したものといわれて¹⁾いる（図版1-1参照）。

筒井城が立地するのは旧富雄川形成の緩傾斜扇状地上であり、とくに外濠はその富雄川の旧流路²⁾をたくみに利用している。なお、外濠の南側部分は、いわゆる「北の横大路」に接しており、ほぼ東西にまっすぐに伸びている。

筒井城跡においては、過去に2例、発掘調査がなされている。まず1次調査（昭和57年）では、筒井城のほぼ中心地と目されている字名「シロ」地区において実施され、柱穴、ピット、溝、井戸³⁾等の遺構が確認されたものの、事情によって試掘調査のみに終わり、本調査は未だなされていない。また、2次調査（昭和62年）では、字名「東門」地区が調査されたが、検出遺構は14世紀代を中心⁴⁾とする井戸や溝で、筒井城と直接関連する遺構はほとんど検出されていない。

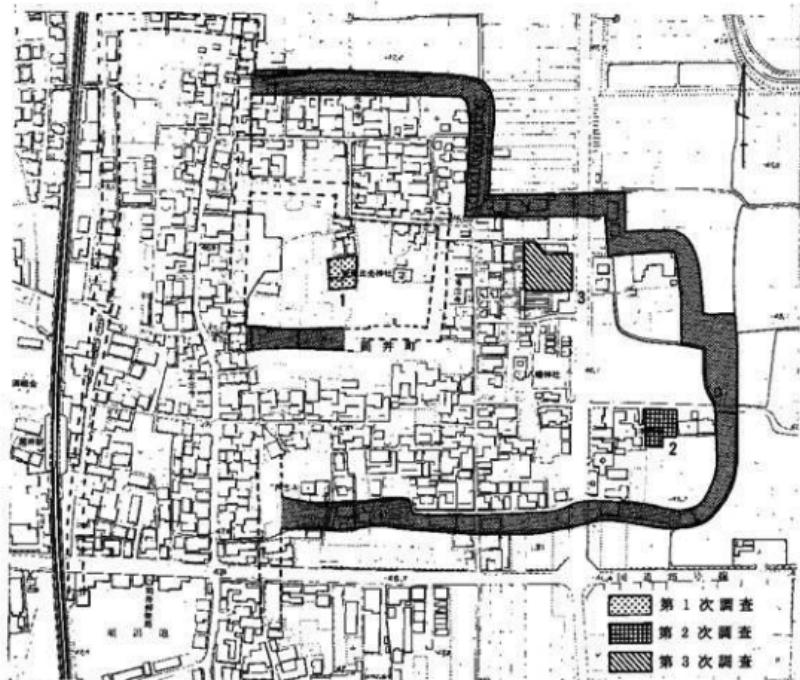


図2 筒井城跡および既往の調査位置 (S: 1/5,000)

III 調査の概要

1. 調査方法および層序

調査に際しては、対象地に南北約28m、東西36mのトレンチを配し、表土を重機によって除去した。

層序は、現耕土（黒褐色土）下に床土1（暗青灰色砂質粘土）、床土2（灰色粘土）と続き、これらを除去すると淡黄色粘土面が露呈する（図3）。これが今回の遺構検出面である。なお、図示していないが、この下位、地表面下約1.2m（標高47.8m）付近には厚さ約30cmにわたって泥炭（泥炭混）層の堆積がみられた。

I	黒褐色土（耕土）
II	暗青灰色砂質粘土 (床土-1)
III	灰色粘土 (床土-2)
IV	淡黄色粘土 (遺構面)

図3 基本層位柱状図
(S : 1/10)

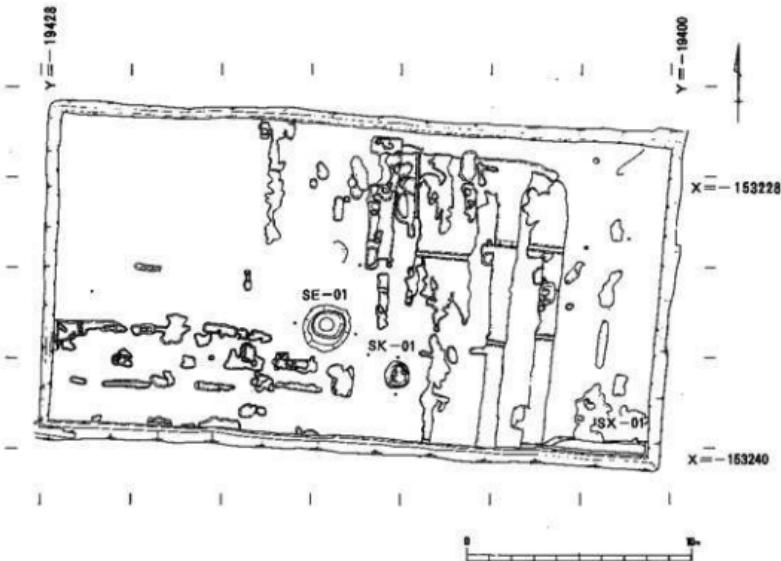


図4 検出遺構平面図 (S : 1/250)

2. 遺構

①SK-01

平面形は、ほぼ円形を呈する比較的大型の土坑である。直径は約1mを計る。断面形状はきわめて特異で、内部において土坑側面をほりこみ、“巾着状”となっている。なお、土層に関しては直径の最も小さい“くびれ部分”によって明瞭に分層が可能である、上層は暗灰褐色砂質粘土層、下層は炭化物や灰を多く含んだ暗灰色粘土層である。このうち、遺物を多く含んでいたのは下層部分である。

このSK-01の時期は、出土した瓦器窓、土師皿はいずれも下層出土のものであり、土坑自体の堆積は人為によるものなので、その一括性はきわめて高いものと評価しうる。今回、図示可能なものは全て図7において示した。

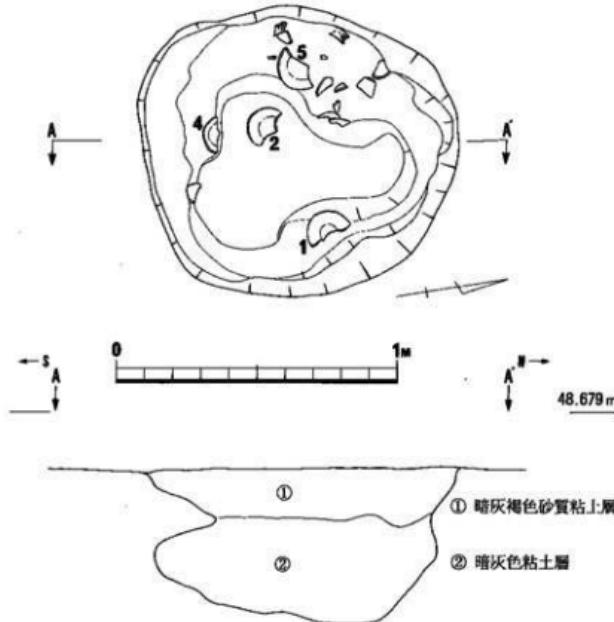


図5 SK-01平面図および断面図 (S : 1/20 平面図中の番号は遺物番号と対応)

②SE-01

掘り方の直径約2m、深さ約3mを計る井戸である。井戸枠として瓦質の井筒（直径61.5cm、高さ41.5cm）を用いている。井筒は6段、遺存していた。なお、断面断ち割りは原因者の要請によつてやむなく中止したため、調査方法としては井筒を一段づつ掘り上げてゆく他になく、結果として断面図を作成することはできなかった。出土遺物には土師質の羽釜、土師皿、鎌、包丁、錢貨等がみられた。時期は、これらの出土遺物より推して15世紀末と考えられる。

③その他の遺構

調査地区内においては、浅い溝やピット等が検出されている。これらは、該地に存在した何らかの建築物の痕跡と思われるものの、それを構造的に把握することは、はなはだ難しい。遺構の時期は、先記したSE-01に併行するものと思われる。すなわちここにあった建築物は筒井順慶の郡山城移転（1480）に伴って、解体、移築されたものと推定しうる。

なお、図4に示したSX-01中より後述の犬型土製品（図7-7）が出土した。

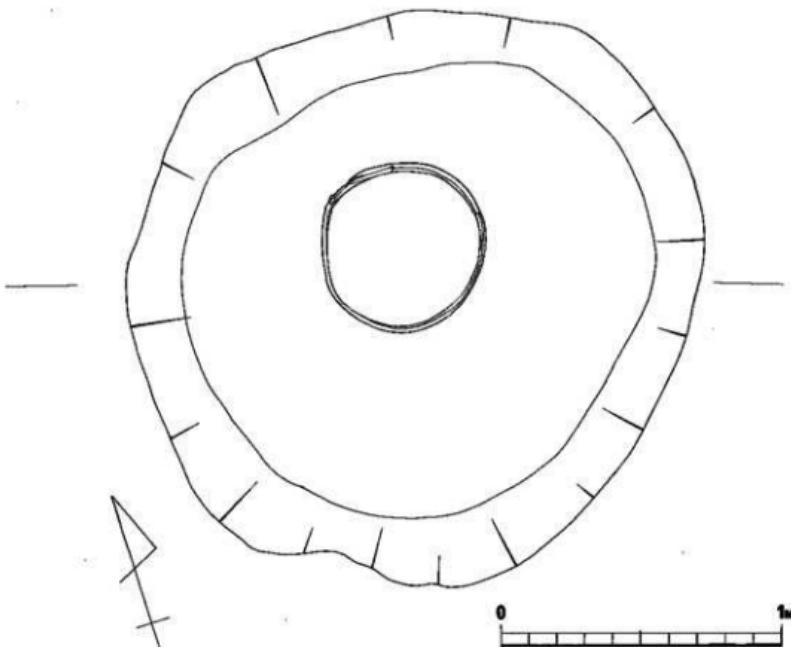


図6 SE-01平面図 (S: 1/20)

3. 遺物

①SK-01出土遺物(図7-1, 2, 4, 5)

ここに示すSK-01出土遺物は、全て図5に示した土層断面図中、下層より出土したものであり、その一括性はきわめて高い。

1、2は、瓦器碗である。外面には指頭による縦方向への圧痕を明瞭に残す。見込み部分の暗紋は退化したラセン状を呈する。川越氏編年のIII-B型式に該当する資料である。⁵⁾ 1の口径14.5cm(復元)、高さ5.5cm。2の口径14.7cm(復元)、高さ5.7cm。

4、5は土師皿である。体部はほぼ直線的に立ちあがり、底部は若干の上げ底である。5は灯明皿として使用されたもので、内、外面に煤の付着をみる。4の口径14.0cm(復元)、高さ2.1cm。5の口径14.6cm、高さ2.5cmを測る。

②SE-01出土遺物(図7-3, 6, 8、図8-9, 10、図版6-S1~S7)

ここに報告する遺物は、8の井筒を除くと、全て井戸枠内より出土したものである。なお、今回報告したものの他に、石仏が一体出土している。

3は、土師皿である。灯明皿として使用されており、煤が付着している。口径9.2cm、高さ2.0cmを測る。

6は、土師質の羽釜である。口縁部は外面に強く屈曲する。外面に煤の付着をみる。体部大半以下は欠失。口径20.8cm、最大径23.8cmを測る。

8は、瓦質の井筒である。外面調整はヨコナデを用いる。内面には粘土帶積み上げの痕跡を有する。直径73.2cm、高さ41.5cmを測る。今回はこれと同規格のものが計6個体、井戸枠として用いられていた。

9は、鎌である。柄部は遺存していない。先端部および基部の一部を欠くものの、刃部に関してはよく原形を止めている。刃の残存長15.4cmを測る。

10は包丁である。刃部は大半が折損しているが、柄部木質は完全に遺存している。柄部には三口の彫りがみられる。柄部の長さ11.4cmを測る。

S1~S7(図版6)は、いずれも11世紀初頭から12世紀初頭にかけて、わが国に輸入された宋銭である。S-1は、景德元宝(初鑄1004年)。直径24.1mm。S-2は、祥符元宝(初鑄1008年)。直径24.5mm。S-3は、天禧通宝(初鑄1017年)。直径23.5mm。S-4は、紹聖元宝(初鑄1094年)。直径23.9mm。S-5は、聖宋元宝(初鑄1101年)。直径24.2mm。S-6は、大觀通宝(初鑄1107年)。直径24.7mm。S-7は、政和通宝(初鑄1111年)。直径24.1mm。

③その他の遺構出土遺物(図7-7)

7は、犬型の土製品である。手づくね成形によって製作されているが、脚部のみは別体成形の後に接合したものらしい。今回出土のものは脚部はいずれも欠損している。また、同部下半以下も欠損。残存長で6.9cmを測る。なお、嶋谷和彦氏によれば同種の犬型土製品はこれまでに25遺跡で

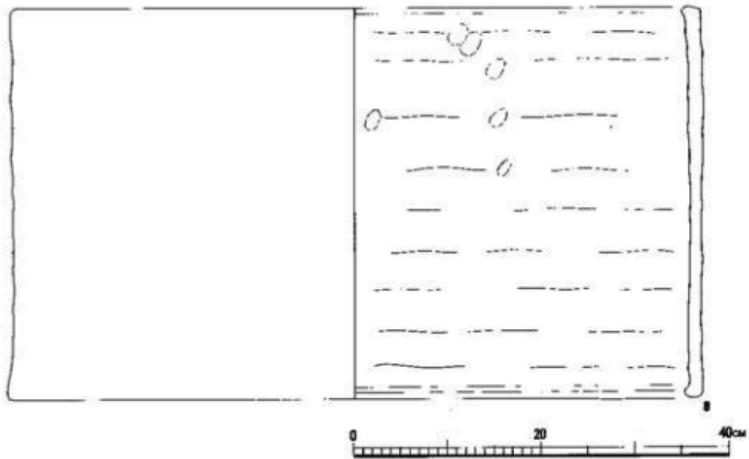
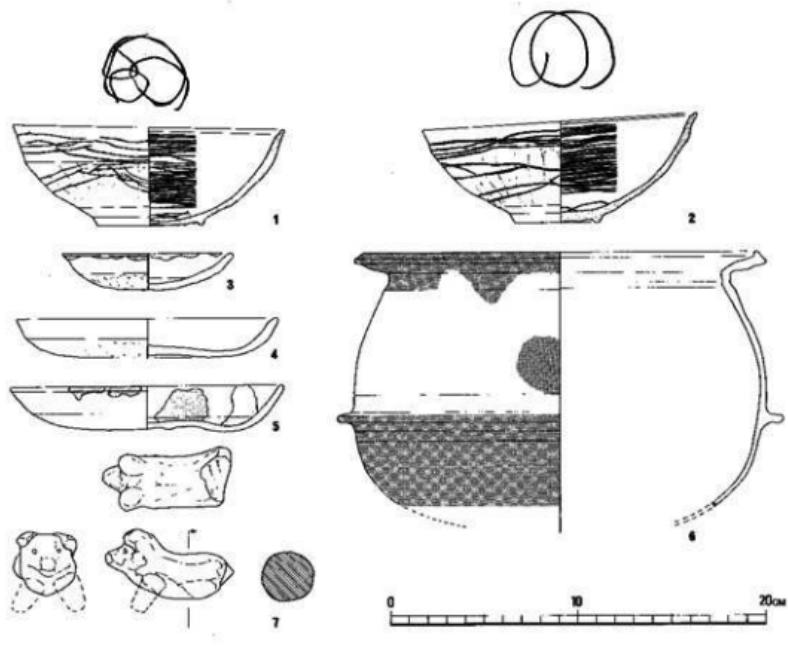


図7 出土遺物実測図I (1.2.4.5=SK-01下層出土、3.6.8=SE-01出土、
7=SX-01出土 S: 1/3 8のみS: 1/6)

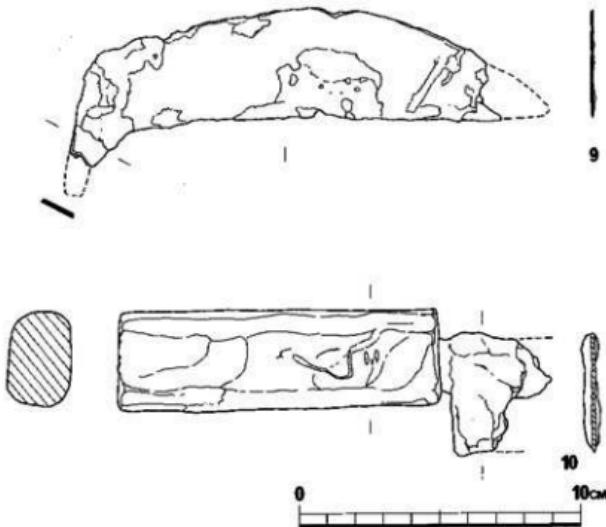


図8 出土遺物実測図II (9・10=SE-01出土 S: ½)

69例確認されている。

IV　まとめ

今回の調査においては、16世紀後半、つまりいわゆる「織豊時代」において、この地に何らかの建造物が存在したことを確認することができた。その建造物自体は、筒井城の廃絶に伴い、郡山城へと移築されたと思われるため、礎石その他の遺構は全く遺存しておらず、残念ながらその性格や規模等についてはほとんど知ることはできなかった。しかし、こうした「完全なる解体・移築」が、筒井氏の拠城が筒井城から郡山城へと遷った際に行われた、という点が考古学的に確認し得た、という点においては、有意義な調査であったということができる。

また、SE-01は、建物に伴う施設であるが、建物の移転に伴い、それは人為的に井戸枠上部を抜き取られ、きちんと埋め戻されていた。また、枠内より宋銭7枚、あるいは石仏が出土したこと、井戸廃絶に伴いある種の祭祀的行為が行われた可能性を示唆する。今後の類例調査が必要であろう。

また、筒井城とは直接には関連しないものの、SK-01は、13世紀初頭の、祭祀的な用途をもつと考えられる遺構である。これも、その断面形状が特異である点など、注目すべき点が多い。

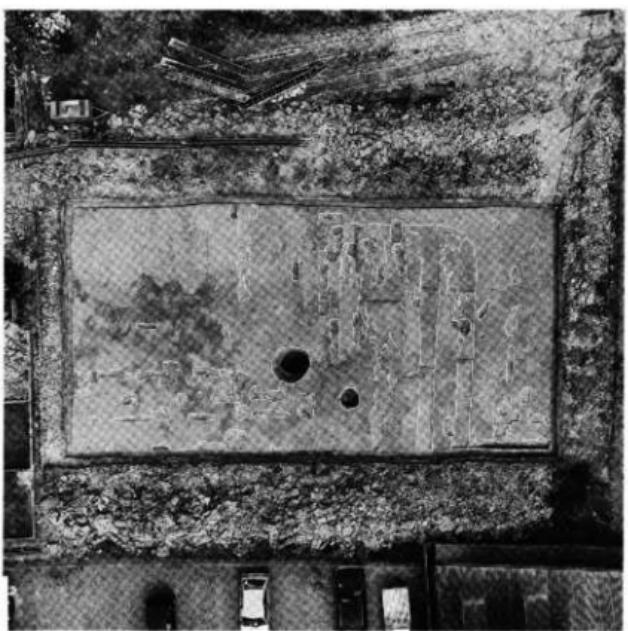
近年、全国的に中、近世を研究対象とする考古学が盛んに行われている。また、それに従事する研究者も、その数、質ともに弥生や古墳時代の研究者を凌駕する勢いである。“モノ”を研究対象とする考古学が、今までの史料中心の中、近世史を大幅に塗り変える日は、そう遠い将来の話ではないと考えるのは、あながち筆者ばかりではないであろう。筆者自身は、当該分野においては全くの素人でしかないが、この小レポートが中、近世考古学研究上、微々たるものとはいへ何らかの知見を加えうるものであれば、と願うものである。

<参考文献>

- 1) 村田修三「筒井城」「日本城郭体系」第10巻、新人物往来社、1980
- 2) 山川均「地形的条件からみた遺跡の立地および分布状況の研究」「文化財学報」第7集、奈良大学文化財学科、1989
- 3) 伊藤勇輔「筒井城試掘調査概報」「奈良県遺跡調査概報」1982年度、奈良県立橿原考古学研究所、1980
- 4) 山川均「筒井城第2次 東門地区発掘調査概要報告」「大和郡山市教育委員会、1988
- 5) 川越俊一「大和地方の瓦器をめぐる二・三の問題」「文化財論叢」奈良国立文化財研究所、1983
- 6) 鳩谷和彦「織豊期の大型土製品」「関西考古学研究」I、関西考古学研究会、1991



1. 調査地周辺航空写真（真上より、上が北）



2. 調査地航空写真（真上より、上が北）



1. 菅田比売神社（简井城中心推定地）



2. 遺存する堀割（简井城北側部分）



1. 調査地全景（東より）



2. 同上（西より）



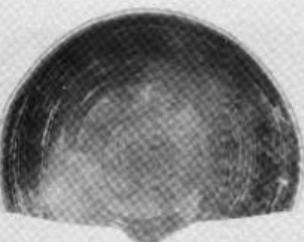
1. SK-01 土器出土状況（北より）



2. SE-01 井戸枠上端部検出状況（北より）



1-a



2-a



1-b



2-b



3



4



5



6



7-a



7-b



9



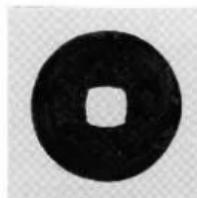
10

1~5、9、10 ($S \div \frac{1}{3}$)、6 ($S \div \frac{1}{4}$)、7 ($S \div \frac{1}{2}$)

1、2、4、5 (SK-01)、3、6、9、10 (SE-01)、7 (SX-01)



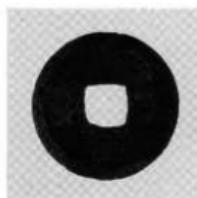
S-1 景 傅 元 宝



S-2 祥 符 元 宝



S-3 天 禧 通 宝



S-4 紹 聖 元 宝



S-5 聖 宋 元 宝



S-6 大 觀 通 宝



S-7 政 和 通 宝

1991年3月31日

大和郡山市文化財調査概要20

筒井城第3次

森目地区発掘調査概報

編集行 大和郡山市教育委員会
大和郡山市北部山町248-4

印刷 明新印刷株式会社
奈良市横本町36番地